

平成 25 年度（後期）海外渡航旅費助成金 報告書

京都大学防災研究所 修士課程 2 年 木内亮太

このたび日本地震学会による平成 25 年度（後期）海外渡航旅費の助成を受けて、2013 年 12 月 9 日から 13 日まで San Francisco の Moscone Convention Center で開催された AGU Fall Meeting に参加し、ポスター発表を行いましたのでその成果を報告致します。

周知のとおり AGU Fall Meeting は非常に規模の大きな学会ですが、私にとってはこの学会どころか海外の学会に参加するのが初めてでしたので全てが新鮮な体験でした。前日に San Francisco に着いた私は、学会初日の朝に発表ということもあって下見も兼ねて Registration を済ませに会場に向かいました。1 日に 3000 件ほどの発表が行われるポスター会場は予想していたものよりも大きなものでした。しかしながら、1 つ 1 つのポスターボードは横に 180cm と広く設定されているので、議論するには快適なものでした。

私は“Seismology General Contributions”というセッションにおいて“Estimation of Radiated Seismic Energy from Teleseismic P Waves”というタイトルでポスター発表を行いました。本発表は世界中の M7 以上の地震を解析対象に、遠地 P 波を用いて地震波エネルギー及び見かけ応力を推定するという内容です。国内の学会では同様の研究をされている方が少ないので、技術的な部分や細かい部分について踏み込んだ議論をする機会が中々ないのですが、今回は幸いにもそのような機会に恵まれました。特に、先行研究として参考にさせて頂いている海外の複数の研究者に質問や貴重なご意見を頂いたことは、この学会に参加した最大の収穫でした。ただ、海洋性地殻で発生する横ずれ型地震の際に地震波エネルギーの値が大きいという結果の解釈に対して意見を求められた際に、答えられなかったことは自分の力不足だと痛感しました。今回の AGU Fall Meeting において、“Oceanic Strike-Slip Faulting: Transforms to Intraplate”というセッションが開かれたように、その発生メカニズムなどに関してはまだまだ発展途上でもあることを知り、正解とは限らずとも自分の解釈を持っておくべきだと改めて認識させられました。

自分の研究発表以降、関連する分野だけでなく“海外の研究者の間ではどのような研究が盛んであるか”をテーマに、できるだけセッションを絞らずに様々な研究発表を聞くことにしました。その中でも特に誘発地震に関する発表が多かったのが印象に残っています。巨大地震による動的誘発に関する研究は国内の学会でも聞く機会がありますが、地熱活動や流体の注入、ガスの圧入による誘発地震などはあまり馴染みの少ない分野でした。しかし、用いている手法な

どは **Seismology** の分野の発表だけあって、馴染み深いものでした。地震波トモグラフィーや雑微動を用いた相互相関による速度構造や、**Matched Filter Technique** を用いた地震検知と誘発の原因との比較を行っているものがほとんどでした。こういった研究発表を聞いて、それぞれの研究者の研究目的に直に触れて、今後の自身の研究に関する発展の方向性の参考にもなったかと思えます。

今回、**AGU Fall Meeting** の参加によって自身の研究のみならず、今後の研究生活を送っていく糧になる多くのことを学ぶことができました。最後になりましたが、このような機会を与えてくださった日本地震学会及び関係者の皆様に深く御礼申し上げます。ありがとうございました。